博士論文（要約）

共和政期ローマにおけるローマ人の宗教についての一考察

― religio 概念を手がかりとして―

小堀馨子

共和政期ローマにおけるローマ人の宗教についての一考察
－ religio 概念を手がかりとして－

序章

第一節　本研究の方法について　1

第二節　本論文の扱う時代と領域　5

第三節　共和政末期までのローマ宗教に関する研究史　10

第四節　religio を取り上げる意義　26

第一章　ローマ宗教における神々の世界

第一節　古代ローマにおける神々と人間　34

第二節　共和政期ローマの神々　36

第三節　神格化された抽象概念　39

第四節　ラテン語重要概念の検討　43

第五節　古代ローマの法律と religio　48

第二章　古代ローマ人の卜占に対する態度　－　慎んで神意を伺う

第一節　古代ローマ人の神官職の概要　54

第二節　共和政期における鳥卜官制度　71

第三節　共和政期における腸卜官制度　93

第三章　古代ローマの忌み日と墓

序節　古代ローマの忌み日　114

第一節　古代ローマにおける死者祭祀――パレンタリア祭考　120

第二節　古代ローマにおける死者祭祀――レムリア祭考　138

第三節　古代ローマにおける墓と葬送儀礼　149

第四章　レリギオー―宗教的なるものに対するローマ人の態度

第一節　religio の研究史　164

第二節　キケロ以前及びキケロと同時代の用法　176

第三節　キケロの用法から窺える religio の意味の拡大　193

結論　217

参考表　227

参考文献　228

博士論文の内容を要約したもの本文

博士論文の一部がすでに下記書籍として出版されており、

契約内容によりインターネット公表に対する許諾が得られていない。

さらに、５年以内に出版予定につき、以下の文のみ公開可とする。

市川裕・松村一男編著「宗教史とは何か」下巻、リトン社、2009 年、

ISBN-13: 978-4863760080

論文題目：　共和政期ローマにおけるローマ人の宗教についての一考察
－ religio 概念を手がかりとして－

氏　　名：　小　堀　馨　子

本論文は、共和政期ローマにおけるローマ人の宗教に関して、ラテン語の religio という概念を手掛かりにして、古代ローマ人がどのような形で宗教的な事柄、彼らの言葉で言えば「神々に関する事柄」に対応していたのか、そのあり様を検討し、そして、そこに現れる彼らの思想の意味を探る試みである。従来の歴史学研究の立場からは、史料分析を中心に据え、史料本文の表現の下にこめられている古代ローマ人の思想の解明にまで立ち入るだけの関心を示していない研究が多かった。その一方で宗教学の立場からは、東方から流入した諸宗教が古代ローマ人の間でどのような役割を果たし、また、影響を与え、且つ自らが変容を遂げていったかについての宗教史的研究は存在したが、古代ローマ人自身の宗教への関心は概して低調であった。それらはとかく十分な史料分析に根差さない、現象面

に主に着目しての研究が多くなっていた。本研究は歴史学からの視点と宗教学固有の視点との双方の間に生じがちな間隙を調整する架け橋となるような研究を目指した。

本論文では序章第二節で本論文の扱う古代ローマ共和政期という時代と、その時代のローマという国家の版図の輪郭を確認し、政治体制を概観した。ここで重要なのは、共和政期ローマにおいて、「宗教」的な事柄、即ち神事に関する事柄を決定するに当たって、最高権限を有していたのは元老院であったという事実である。元老院は共和政期ローマにおける立法と行政の最高機関であるが、この政治的最高機関と宗教的最高機関がほぼ重なっている、というのが共和政期の古代ローマの特徴である。古代ローマの宗教を考える時には、この事実を大前提にしておくべきである。

序章第三節では古代ローマ宗教全体に対する諸研究の中で代表的なものを個別に概観し、研究史の流れと、その流れの中に浮上してきた問題意識の変遷をあぶり出した。1960 年代まで主流であった「ローマ宗教衰退論」は、現在古代ローマの宗教研究に携わる研究者の中でこれをまともに奉じている者はいないが、それ以外の分野ではまだ広く信じられている言説であり、宗教学の立場から大部の世界宗教史という作品を著したエリアーデもその旧式の図式に乗っている点を考えるならば、やはり「ローマ宗教衰退論」に対する批判を加えておく必要は今も依然としてある。そこでテーマは大きくなるが、ローマ宗教という大きな対象に対する研究史をこの節で扱った。

続く序章第四節では、本論文で最も重きをおくキーワードとして religio を取り上げる意義を述べ、キケロやゲッリウスによる定義を十分に検討し、またそれを補完するようなマイケルズの業績にも示唆を得て、religio が一義的には到底定義できないほどにその用法が多様であることを確認した。またグロズィンスキーの提示する religio と superstitio が重要な対概念であること、しかしその対称性を明らかにするためにはさらなる詳細な語義分析が必要であることに同意しつつ、一方で、ケレーニイが指摘するように religio の持つ〈慎しみ〉の意味は、ローマ人の宗教生活における積極的な自発的態度を意味する重要な含意であることを確認し、通常の歴史学において従来記述が乏しかった religio に特に照明をあてて考察することの意義を主張した。「慎しみ」という日本語自体にも多様な意味があるが、大言海や広辞苑をひもとくと「１．用心する、あやまちがないように心入れをする。油断なくする。２．恭しくかしこまる。３．しくじらぬよう、気を付ける。度を越さないよう控えめにする。４．物忌みする」と、第四章第一節で指摘した religio の四つの用法の中で二番目の「細心の注意を払うこと、規範破りを戒める態度、規範遵守、良心の咎め」という用法に重なり、また religiosus という形容詞の有する「忌み」的な用法とも重なる。その意味でこの日本語は religio の二番目の用法を表わす時には適切な訳であろう。ケレーニイはローマ人の宗教的態度の特徴は「自らの表徴に慎重に耳を傾けて聴くこと」「傾聴し、あらゆる表徴に対して開かれ、たえず順応してゆく態度」「傾聴し、服従して＜慎しみ（レリギオー）＞に従う能力」であると記す。この洞察は日本語の「慎しみ」という訳語とも内容的に重なっており、religio に関する考察を深めれば深めるほど、正鵠を射ているように

思われる。それゆえ「神の言葉に慎んで耳を傾ける」という姿勢を、ローマ人の「神的な事柄に対する態度」として念頭におきながら、ローマ宗教の中の多様な諸現象に向き合う時に、その底流として多彩な諸現象を貫くものを理解することが容易くなるのではないか、という問題意識が本論文の発端にある。勿論当該節で論じたように、また第四章第一節でも論じたように、ケレーニイの論考にも瑕疵はあるが、その瑕疵をさて措いて参考にするだけの価値はあると思われる。

第一節

第一章では、ローマ宗教を理解するにあたって重要な要素であるが、本論文で各章を割り当てる程には紙幅を費やせなかった項目について、概説的に簡潔に述べている。第一節から第三節はローマ人が神をどう捉えていたか、また、様々な祭祀を受け入れることによって、宗教が活性化していた点を、特定の神格に神殿が奉献された時期を祭祀流入の時期と看做して、共和政期の状況を史的観点から概観した。この部分に新たな論点はないが、ローマ宗教がどのような変遷を経て来たか、という歴史的事実を把握するにあたっては参考資料となる。

第四節の中で、“numen”及び“do ut des”は重要なキータームなので、再度強調しておきたい。numen は従来「非人格的な集合体としての神の力」と解釈されてきたが「(ある特定の神が）示した神意」という意味が相応しいことを検討した。numen が「神意」を意味することは重要である。つまり、numen という言葉は神々の存在を前提としており、即ち何らかの意味で神の存在を認めるという広義の有神論が前提となっているからである。

“do ut des”は「貴方が与えてくれるようにと私は与える」と訳される。これは一回限りの互酬的行為と捉えると、機巧的で利己的な態度に見えてしまう。それは偏りのある解釈である。そこには贈与関係を永続的に続けるという長期にわたる互恵的関係を築くなかで、利己ではない、相手に対する敬意をこめて、自らの主張は控え目にしつつ、積極的に交流関係を保とうとする態度が現れている。そしてその態度は、religio の有する内包とベクトル的に合致する、ということを確認した。

sacrificium（犠牲式）については、十分に紙幅を割けなかったが、do ut des の関係に基づいて行われる祭儀行為である。この犠牲式の中で最も重要なのは、犠牲獣の内臓を観察して得られる腸卜であった。第二章第三節で詳述するが、犠牲式の度に行われる腸卜こそが、「神意を伺う」というローマ人にとって最も重要な行為であり、式の中で最も重要な部分であったことは記しておきたい。

第五節で、古来のローマの法律に近いと考えられる、キケロの『法律について』第二巻 19-22 節を検討した。これも第一節から第三節と同様に、古代ローマにおいては、神々に関する事柄では法が重要な役割を果たしていたことを参考資料として示す意図があった。当該個所を詳細に論じていては紙幅が足りなくなるので概略に留めた。

第二節

第二章では、古代ローマの卜占が実は「慎んで神意を伺う」というローマ人にとって重要な態度を表わす事象であることを、神官職の職務の分析から考察し、特に第二節と第三節で卜占にとって重要な鳥卜官と腸卜官の制度の違いに焦点を当てて考察した。

ローマの祭司制度には二つの大きな特筆すべき点がある。一つは祭司に任じられるのは世俗の官職と同様、貴族層であったことである。実際貴族と平民の間に大きな区別が設けられていた共和政初期には、貴族が公職を独占していた。その貴族と平民の区別がなくなった共和政中期にいたって、諸々の公職を含めて祭司職も貴族と平民との双方から同じ人数が選ばれる職が多くなったが、平民であっても元老院議員級の富裕層に限られていた点で、公職を占めるのは社会の上層部であった。そのような状況下で、世襲でもなければ、専従的に訓練を受けた者でもない、官職の一つとして祭司職があったことは重要である。

祭司職のある部分は、他の官職と同様立候補による公選であったが、一部の神官団では、欠員が出ると在任者が候補を推挙するという、ある程度の独立性が保たれていたところも重要である。しかし一個人が複数の祭司職を兼任することができないこと、また定員が複数の祭司団の場合、同じ氏族から同時に二名以上一つの祭司団に属することはできないこと、というのも重要である。これは特定の氏族による独占を防ぐ制度であり、従って独裁を防止する制度であった。共和政期のローマ人が、独裁に結びつく可能性を熱心に排除しようとし、独裁を可能にしないようなシステムを作り上げることに向けていた努力には驚くべきものがある。血縁関係で結ばれているわけでも、閉鎖的職能集団であるわけでもない集団をまとめて行くという、同時代の古代社会においては珍しい状況が出来していたのが共和政期ローマの状況であった。それは祭司職においても例外ではなかった。このように、ローマ社会においては、祭司職も行政職も同じ論理で動いていた、ということはローマの祭司職を考えるにあたって根本的に押さえておきたい重要な点である。また、祭司職集団の内部で階層秩序が確立しておらず、三大神官職もしくは四大神官職も人や時代によってどの神官職がそれに該当するのかまちまちであったのも、特色の一つであろう。

このような祭司制度が支えていたのは、公事としての神事であった。この神事の一つに卜占があった。古代ローマにおいては、卜占は重要な国事行為であった。それは、卜占を行う主体が元老院であり、神官団は元老院からの諮問があって初めて行動を起こすことができる、というシステムからもよく窺える。そこで、第二節では鳥卜官の制度を検討した。鳥占いは、人間の側がまず行動を起こして、神に神意を伺う時に行われる手続きである。人間が立てた問いに対して、神々は同意するかしないかの二者択一で答えを与える。この手続きについて、ウァッロとリウィウスの著作の中で鳥占いについて述べているテキストを検討した。その結果、古代ローマにおける鳥占いの方法は、神とのコミュニケーションの言語であり、しかもあたかも法的手続きででもあるかのように、明晰な論理に基づいた

手続きであることが確認された。このような明晰な論理性が古代ローマの鳥占いの特徴であろう。実際キケロは鳥占いが学問（disciplina）であり、技術（ars）であり、知識（scientia）であると定義している。ギリシア哲学の訓練を積んだ知的なローマ人によるこのような定義は信頼に値する証言であると考えられる。それゆえ、鳥占いが彼らにとってはこのようなものであったということは重要である。

そのキケロは、共和政末期の鳥占いが、同じ「鳥」を用いていても、共和政期半ばまでの空飛ぶ猛禽類の数や方向に頼る手法に対して、共和政中期以降の家禽の餌の食べ方を用いる手法は、結果に対して人為的操作を加える余地があるのだから欺瞞であると『卜占について』の第二巻で断じている。しかし、ここで注目したいのは、キケロが断じているのは欺瞞的な手法であって「神意を伺う」という行為そのものではないことである。正しい方法であれば「神意を伺う」ことがローマ人にとって重要であり、それこそがローマ人の繁栄に繋がっている、という意識は、キケロの諸作品を通じて窺うことができる。以上のことを鳥卜官の制度を通して検討した。

第三節では、第二節の鳥卜官とは逆に、神の側が人間に対して行動を起こした場合の、神意の伺い方を、腸卜官制度及び予兆を通して検討した。その際には、シビュラの書を通じて神意を探る十五人委員の存在にも触れた。ここで予兆という言葉から、未来の出来事を予見する試みを想像するのは間違いである。予兆というものは神々がローマ人に対して発した警告であり、神意であった。神々は既に起ってしまったがその結果がまだ明らかになっていない悪しきこと、つまり do ut des の関係によって築き上げられてきた神々と人間との間の連続的な友好関係を損なうような出来事が生じた時に警告を発する。その神の言葉に熱心に耳を傾けて、神意が指し示している事柄が何であるか具体的につきとめ、損なわれてしまった友好関係を元に戻すためには何をすべきか探ることが、予兆解釈の本意であった。

一方、腸卜官に関してキケロの『占者回答論』に引用されている腸卜官団の言葉の分析と、その言葉に対するキケロ解釈を通して、腸卜官団の言葉もまた「神意を伝える」手段としてローマ社会で機能していたことを観察した。『占者回答論』は前 56 年に元老院の前で行われた演説で、前 57 年に神官団の前で行われた『我が家について』とセットになって考えるべき演説である。詳しい経緯は本文で論じているので、ここでは結論だけ述べる。キケロ自身が腸卜官団の言葉の真正性を認めていたかどうか、あるいは信じていたかいなかったか、ということは問題ではない。古代ローマ社会が、腸卜官団の言葉によって神意を伺うことができる、という筋立てを有効な論理として受け取ることのできる社会であった、という事実が重要である。そこからは、共和政末期が「ローマ宗教衰退論」が主張するような宗教が衰退した社会であるとは言えない。

またこの考察から窺えるのは、古代ローマ社会においては、何を信じているかが重要なのではなく、何を行うかが重要であったということである。その「何を行う」かに当たるのが、「神意に耳を傾け、聴き取った内容に従った振舞いをする」ことであり、それは具体

的には神意に叶う適切な儀礼を行うことであった。そこにも根底に流れているのは religio の態度であったということができよう。

第三章

第三章では、dies religiosi と呼ばれる忌み日と、loca religiosa と呼ばれる墓について考察した。第一節と第二節では、忌み日の中でも死者の祭りであるパレンタリア祭とレムリア祭について検討し、各祭儀の儀礼について論じた。dies religiosi とは冥界と死者に関連のある日であるが、それが同時に国家的祭儀と結びついていることが重要である。その例として、パレンタリア祭とレムリア祭を挙げて論じた。

パレンタリア祭自体は 2 月 13 日に行われるが、この日から 2 月 21 日のフェラリア祭までの間に行われる祭を一まとめにしてパレンタリアと呼ぶこともあるので、本論文ではこの数日間の一連の祭をまとめてパレンタリアと呼ぶ。このパレンタリアには、2 月 15 日のルペルカリア祭のような建国神話にまつわる祭りも含まれている。前半のパレンタリア祭、ルペルカリア祭、クィリナリア祭は、国家祭儀的性格が強い。またパレンタリア祭自体も詳細に読みこんでゆくと、タルペイア伝承との関わりから、国家祭儀的性格が浮かび上がる。それらに対してパレンタリアの中に位置する 2 月 21 日のフェラリア祭は家族の祭礼の色合いが濃い祭儀である。しかし、この祭儀も詳細に観て行くと、ラレス神の母の問題で建国神話と繋がっていることがわかる。この繋がりが生じたのは前 5 世紀の王政期に遡るような遠い昔ではなく、紀元前 1 世紀に近い時代のことではないかと推測されるが、現存する資料から厳密な時代特定に至ることは難しい。このフェラリア祭の後には 2 月 22 日のカリスティア祭、2 月 23 日のテルミナリア祭と祭日が三連続で続く。フェラリア祭を含めたこの三つの祭日は、かつて暦が三月始まりであった古代ローマにおける一年の終りを締めくくる境界の祭としても捉えることができる。しかもテルミナリア祭にも建国神話譚は絡んでいる。こうなると何が私的祭儀で、何が公的祭儀であるのか、問題は難しくなる。「公的祭儀」と「私的祭儀」という従来の区分が相応しいのかどうか、「公私」という近現代でも用いる術語をそのまま古代に当てはめる時には注意が必要である。何れにせよ、死者の祭は私的領域で行われているように見えるが、公的領域の祭儀でもあったことがパレンタリアでは顕著に観察することが出来る。

続く第二節では同じ死者の祭である 5 月 9・11・13 日に隔日で行われるレムリア祭を検討した。この祭礼は、自分たちの血縁の近い祖先を追慕するパレンタリア祭とは性格を異にし、子孫が絶えた、非業の死を遂げたなどで、墓において十分な供養を受けていない死者の霊に対して、生きている者に害をなさないよう宥める祭である。ここでは、唯一詳しい記述を遺しているオウィディウスについて、その記述がアウグストゥス時代に始まった、建国神話と祭儀を結び付ける動きに故意に連動している点を考察した。

それと共に、死者が死後に神になると考えられているその Di Manes について考察を加

えた。大半の墓石には「D・M」と刻まれているが、これは Di Manes の略語表記である。Di Manes は祖霊と似たような存在で、人間が死後に神格化されて集合的な神々の中に融合して加わったものであり、それとともに個人の個性は失われる。古代ローマにおいては、人間は死後に神になると考えられていた。しかし、人間が死後になる神と、生来神であった神との間にラテン語では区別があった。人間が死後になる神は deus で、生来の神は divus であった。しかし、この呼称が「神君ユリウス」に対して用いられたところから、帝政期には意味が逆転して、deus が生来の神を、divus は人間が死後になった神を意味するようになったという経過も生じていた。

このように死者との関連から、第三節では loca religiosa 墓について考察した。ここでは、墓が loca religiosa と呼ばれたことを確認し、religio / religiosus が死者に関連する意味を含んでいたことを確認した上で、religiosus の言葉から一旦離れて、古代ローマにおける埋葬儀礼と埋葬方法の変遷について考察した。

第四節

第四章では、religio という単語に焦点を絞って考察した。第一節では religio に関する研究史を扱い、序章第四節でも取り上げたケレーニイの議論を改めて検討した。ケレーニイは、ローマ人が「神の言葉が傾聴可能である」という前提のもとに、「神の言葉に積極的に耳を傾ける」のがローマ人の宗教的特質であると論じた。またマイケルズもローマ人の行為の自発性について指摘している。そこは見落としてはならない部分であろう。

そこで本論文では、キケロの用法を（１）儀礼や儀式と言った事象を価値中立的に描写する用法、（２）規範、規範破り、規範破りを戒める態度、規範順守、良心の咎め、ある行動を起こすことへの障碍、儀式執行に際しての細々とした気配り、と言った態度を描写する用法、（３）神々への尊崇・畏敬の念、聖性などの宗教感情、（４）迷信と同義の用法、の四種類に分けて考察することを、改めて第一節の末尾で提示した。

第二節ではキケロ以前の前二世紀の著作家たちと、キケロの同時代人とに分けて、religio の用法を検討した。そこから、前二世紀までは、religio は軽蔑的な習俗の枠内での文脈で用いられることが多く、（１）の儀礼や、（３）の神々への尊崇といった用法はみられないことを確認した。続いてキケロの同時代人になると、（１）と（３）の用法も出現し、四種類の用法が全部揃うことを確認した。ことに（４）の迷信と同義の用法は詩人ルクレティウスに顕著であるが、この傾向はエピクロス派哲学の影響を受けた彼独自のスタンスから生じていると考えられる。

第三節では、キケロの用法を考察した。キケロには religio と religiosus が合わせて 563 例あり、全ての例を検討することはできない。そこで、最初にキケロ自身が religio の定義を二つの作品で行っているが、その定義が著作年代によって内容にずれがあることを確認した。つまり、キケロの若年時に執筆された『発想論』では、religio とは（２）の畏怖と

（３）の畏敬であると定義しているのに対して、晩年の『神々の本性について』では（１）の儀礼であると定義している。そこから、キケロ自身でも生涯の間に用法の比率に変化が生じていたことを、数量的統計を補助的に用いながら確認した。

続いて、キケロにおける（４）迷信と同義の用法は、たった 5 例であるので、全用例を検討に付した。その結果、（４）の用法は彼の後期の時代に多く出現していることがわかった。この年代による違いは、弁論であるか哲学的著作であるか、という作品のジャンルの違いもあるので、そこから有効な結論を導くことは難しいが、心に留めておいてもよい事実ではあろう。（４）の用例を検討すると、グロズィンスキーに始まって 70 年代以降の歴史学研究で受け入れられてきた、＜適切な頻度・場・形式で行う＞religio 対 ＜不適切な頻度・場・形式で行う＞superstitio（キケロの時代）、もしくは、＜我々ローマ人の正統な＞religio 対 ＜彼ら異邦人の正統ではない＞superstitio（セネカの時代）といった図式化に関しても、（４）の用例は、キケロの時代に生じていたとされる図式への反証となりうる。つまり、superstitio を使ってもよい文脈で、religio を用いるという事態が生じているのである。このことから、religio の意味が多層化しており、単純に A の意味から B の意味へと変わっていったわけではない、難しい単語であることがわかる。キケロの著作は死後すぐに「手本」として読み継がれて古典となっていった。キケロの著作に多様に出現した religio の用法は、後世の著作家がこの単語について考える時に大きな影響を与えたと言えよう。

最後に、キケロ自身が religio に対して、どのように考え、表現していたかを検討した。キケロは、『神々の本性について』という哲学的著作においても、『占者回答論』という弁論においても、ローマ人は他の国民に対して勝るところはないが、religio の点においてのみ勝っているがゆえに、他の国民を支配するものとなった、というある種の「神学」とも呼べるような考えを述べている。religio において勝るとは、「神意を伺い、神意に耳を傾ける」ことに優れていると言い換えられる。

「聴く」とは「相手の言うことに熱心に耳を傾ける」ことであり、その時には、どうしても「自分が既に持っている観念は一旦脇に置いて」という態度が必要になる。その一歩引きさがる慎重な態度は religio の第二番目の用法「良心の咎め」によくあらわれているし、また注意深く傾聴するという態度は「細々とした気配り」という同じく第二の用法によくあらわれている。キケロの第二の用法は割合から言えばどの時期でも変わらない割合で用いられている。この第二の用法が、実は「注意深く耳を傾ける」という主体性の発露であるとすれば、「規則遵守、規則違反、良心の咎め、禁忌、行為への障碍」といった近代的には、主体性を奪うような内容に見える行為も、実はローマ人にとっては、その中に表明されているのは積極的主体的な行為であったのではないかと思われる。

このように全体を通して、改めて古代ローマ人の「神々に関する事柄」への態度、現代の言葉で言えば「宗教」に対する態度を考えてみると、それは神々の存在を前提とした上で、「神意に耳を傾ける」と一言で表すことができる。しかも神意に耳を傾けるためには、

自己をある程度抑制し、しかも内容を正しく聴きとらねばならない。正しく聴きとるには注意深さが必要である。そして聴きとった内容に対して行動面でそれへの聴従を表す必要がある。その時に、彼らが行っていた様々な儀式、特に、犠牲式や卜占を検討すると、その中には実は彼らなりのこの原則が発露していたことが窺える。また、彼らが呼称において区別を設けていたとはいえ、端的に一言で言えば、人間が死ぬと神になると考えていたがゆえに、とり行っていた埋葬儀礼も、死者との交流というより、神的な存在との交流と考えてゆくと、やはり一歩引いて自己を抑制するなかで、神的なる存在と交流をはかる行為であったと言えよう。

それゆえ、古代ローマ人の宗教意識とは如何なるものであったか、という問いがもし可能ならばそれは、「神意に耳を傾けてそれに従う」という態度の表明であったという答を提出することができよう。

参考文献

EDITIONS, TRANSLATIONS & COMMENTARIES

Collections

Aufstieg und Niedergang der Römischen Welt, Berlin and New York （略称: ANRW）

Malcovati, E. ed. (1979) *Oratorum Romanorum fragmenta liberae rei publicae*, Taurinorum, 4th ed.

Chassignet, M. ed. (1996) *L'annalistique romaine. Tome 1, Les Annales des Pontifes et l'Annalistique ancienne (fragments)*, Paris.

Lexicon Iconographicum Mythologiae Classicae, (1981) Switzerland

Oxford Classical Dictionary (1996) 3rd ed., Oxford （略称: OCD）

Oxford Latin Dictionary (2012) 2nd ed., Oxford （略称: OLD）

Accius

Dangel, J. ed. (1995) *Accius Oeuvres (fragments)*, Paris.

Aratus

Kidd, D. ed. (1997) *Aratus Phaenomena*, Cambridge.

Caesar

Carter, J. M. ed. (1991) *Julius Caesar: The Civil war, Book 1-2*, Warminster, England.

Carter, J. M. ed. (1993) *Julius Caesar: The Civil war, Book 3*, Warminster, England.

Constans, L. A. ed. (1926) *César Guerre des Gaules*, Tome II, Paris.

Fabre, P. ed. (1936) *César La GuerreCivile*, Tome I, Paris.

Hammond, C. tr. (1996) *Seven Commentaries on The Gallic War with an Eighth Commentary by AULUS HIRTIUS*, Oxford.

Meusel, H. ed. (1914) *Lexicon Caesarianum*, Berlin.

Pontet, R. ed. (1900?) *C. Iuli Caesaris Commentariorum Libri III de Bello Civili*, Oxford.

Pontet, R. ed. (1937) *C. Iuli Caesaris Commentariorum Libri VII de Bello Gallico cum A. Hirti Supplemento*, Oxford.

Charisius

Barwick, C. ed. (1964) *Charisii Artis Grammaticae Libri V*, Zwickowae, Germany.

Catullus

Green, P. ed. (2005) *The Poems of Catullus, a bilingual edition*, California UP, London.

Cicero

Dyck, A.R. ed. (2004) *A commentary on Cicero, De legibus*, University of Michigan Press.

Kenter, L. P. ed. (1972) *M. Tullius Cicero, De legibus : A commentary on book I Translation [from the Dutch] by Margie L. Leenheer-Braid.*, Amsterdam.

Pease, A. S. ed. (1920) *M. Tulli Ciceronis De Divinatione*, Illinois.

Pease, A. S. ed. (1958) *M. Tullii Ciceronis De natura deorum libri tres*, London.

Wardle, D. (2006) *Cicero: on Divination Book 1*, Oxford

Ziegler, K. ed. (1979) *De Legibus / M. Tullius Cicero*, Freiburg.

Gellius

Marache, R. ed. (1967) *Aulu-Gelle Les Nuits Attiques*, Paris.

Marshall, P. K. ed. (1968) *A. Gellii Noctes Atticae*, Oxford, (reprint 1990).

Livy

Briscoe, J. ed. (1973) *A Commentary on Livy: books XXXI-XXXIII*, Oxford.

Briscoe, J. ed. (1981) *A Commentary on Livy: books XXXIV-XXXVII*, Oxford.

Oakley, S. P. ed. (1997) *A Commentary on Livy: books VI-X, vol.I Introductuon and Book VI* , Oxford.

Oakley, S. P. ed. (1998) *A Commentary on Livy: books VI-X, vol.II Book VII-VIII* , Oxford.

Oakley, S. P. ed. (2005) *A Commentary on Livy: books VI-X, vol.III Book IX* , Oxford.

Oakley, S. P. ed. (2005) *A Commentary on Livy: books VI-X, vol.IV Book X* , Oxford.

Ogilvie, R. M. ed. (1965) *A Commentary on Livy: books 1-5*, Oxford.

Walsh, P. G. ed. (1993) *Book XXXVIII*, Warminster.

Walsh, P. G. ed. (1994) *Book XXXIX*, Warminster.

Walsh, P. G. ed. (1996) *Book XL*, Warminster.

Lucilius

Baily, C. ed. (1947) *Titi Lucreti Cari, De Rerum Natura, Libri sex*, Oxford.

Charpin, F. ed. (1979) *Lucilius Satires tome II*, Paris.

Krenkel, W. ed. (1970) *Lucilius Satiren*, Berlin.

Lachmann, C. ed. (1876) *C. Lucilii Saturarum*, Berlin.
Marx, F. ed. (1904-5) *C. Lucilii Carminum reliquiae*, Lipsiae.
Warmington, E. ed. transl. (1938) *Remains of Old Latin*, London.

Lucretius
Bailey, C. ed. (1947) *Titi Lucreti Cari, De Rerum Natura*, Oxford.
Ernout, A. ed. (1924) *Lucrèce, De la Nature*, Paris.
Trevelyan, R.C. trans. (1937) *Lucretius, De Rerum Natura*, Cambridge.

Nepos
ネポス『英雄伝』山下太郎・上村健二訳、国文社、1995 年

Ovid
Fantham, E. (1998) *Ovid Fasti Book IV,* Cambridge.
Frazer, *Publius Ovidius Naso Fastorum Libri Sex*, II, London
Robinson, M. (2011) *A Commentary on Ovid's Fasti, Book 2*, Oxford.
オウィディウス『祭暦』高橋宏幸訳、国文社、1994 年

Plautus
Ernout, A. ed. (1936) *Plaute*, Paris.
Goetz, G. & Schoell, F. ed. (1910) *T. Macci Plauti Comoediae*, Lipsiae.
Lindsay, W. M. ed. (1903) *T. Macci Plauti Comoediae*, Oxford.
Lodge, G. ed. (1962) *Lexicon Plautinum*, Hildesheim, (reprint of 1st ed. Leipzig 1924-33).

Sallust
Dietsch, R. ed. (1859) *Gai Sallusti Crispi, Historiarum reliquiae index*, Lipsiae.
McGushin, P. ed. (1977) *C. Sallustius Crispus, Bellum Catilinae: a commentary*, Oxford.
McGushin, P. ed. (1992) *Sallust, the histories vol.1*, Oxford.
McGushin, P. ed. (1994) *Sallust, the histories vol.2 (book iii-v)*, Oxford.
Watkiss, L. ed. (1971) *Gaii Sallusti Crispi, Bellum Iugurthinum*, London.

Terence
Kauer, R. & Lindsay, W. M. ed. (1926) *P. Terenti Afri Comoediae*, Oxford, (rep. 1961).
Marouzeau, J. ed. (1947) *Térence*, Paris.
McGlynn, P. ed. (1963-67) *Lexicon Terentianum*, London.

二次文献

Altheim, F. (1938) *A history of Roman religion*, translated by Harold Mattingly, London.

Ando, C. ed. (2003) *Roman Religion*, Edinburgh UP

Bailey, S. (1991) *Cicero Back From Exile: Six speeches upon his return*, The American Philological Association

Beard, M.(1987) 'A complex of times: no more sheep on Romulus' birthday', *Proc.Camb. Phil. Soc.* n. s. 33: 1-15

Beard, M. (1990) 'Priesthood in the Roman Republic', *Pagan Priests*, ed. by, Beard, M. and North, J. A., Cornell UP

Beard, M.and North, J. A. (1990) *Pagan Priests*, Cornell UP （略称: PP）

Beard, M., North, J. and Price, S. (1998) *Religions of Rome*, vol.1 & 2, Cambridge. （略称: RoR）

Benveniste, E. (1969) *Indo-European Language and Society*, tr. E. Palmer, London.

Dangel, J. (1990) 'Accius grammairien?', *Latomus*, 49.

Davies, J. (2004) *Rome's Religious History – Livy, Tacitus and Ammianus on their Gods*, Cambridge

Degrassi, A. (1963) *Inscriptiones Italiae,*

Dumézil, G. (1970) *Archaic Roman religion*, translated by Philip Krapp, London

Durkheim, E. (2001) *The Elementary Forms of Religious Life,* Oxford UP translation.

Feeney, D. (1998) *Literature and Religion at Rome*, Cambridge

Flower, H. (1996) *Ancestor Masks and Aristocratic Power in Roman Culture*, Oxford

Forsythe, G. (2005) *A Critical History of Early Rome: From Prehistory to the First Punic War*, University of California Press

Fowler, W. W. (1899) *The Roman festivals of the period of the Republic*, London

Fowler, W. W. (1911) *The religious experience of the Roman people*, London

Fowler, W. W. (1920) *Roman essays and Interpretations*, Oxford

Frazer, J. G. (1923) *The Golden Bough: A study in Magic and Religion*, London.

Frier, B. W. (1999) *Libri annales pontificum maximorum : the origins of the annalistic tradition*, University of Michigan Press, USA.

Fugier, H. (1963) *Recherches sur l'expression du sacré dans la langue Latine*, Paris

Goldberg, S. M. (2005) "The early Republic: the beginnings to 90 BC", p.15-19 in

A Companion to Latin Literature, Blackwell

Gradel, I. (2002) *Emperor Worship and Roman Religion*, Oxford

Grodzynski, D. (1974) 'Superstitio', *REA*76, 36-60.

Harrison, S. ed. (2005) *A Companion to Latin Literature*, Blackwell, Oxford.

Hartung, J. A. (1836) *Die Religion der Römer nach den Quellen dargestellt,* Erlangen.

Heiken, G., Funiciello, R. and De Rita, D. (2005), *The Seven Hills of Rome: A Geological Tour of the Eternal City*, Princeton University Press.

Holford-Strevens, L. (1988) Aulus Gellius, 2nd ed., London

Hopkins, K. (1983) Death and Renewal, Cambridge

Kamrin, J. and Ikram, S. (2006),"The Ancient Egyptian View Of The AFTERLIFE." *Calliope* 17.1

Kerényi, K. (1962) *The Religion of the Greeks and Romans*, tr. Christopher Holme, London.

Kerényi, K. (1995) *Antike Religion*, Stuttgart.

Kobbert, M. (1910) *De Verborum 'religio' atque 'superstitio' usu apud Romanos*, Knigsberg.

Krahner, L. (1837) *Grundlinien zur Geschichte des Verfalls der römischen Staatsreligion bis auf die Zeit des Augustus,* Halle.

Latte, K. (1960) *Römische Religionsgeschichte*, München.

Liebeschuetz, J. H. W. G. (1979) *Continuity and Change in Roman religion*, Oxford.

Linderski, J. (1986), 'The Augural Law', *ANRW* II.16.3

Linderski, J. (1997) 'Agnes Kirsopp Michels and the Religio', *The Classical Journal*, Vol. 92, No. 4., 323-345.

McCutcheon, R. T. (1995) "The Category 'Religion' in Recent Publications: A Critical Survey", *NVMEN*, vol.42

Michels, A. K. (1967) *The calender of Roman Republic*, Princeton

Michels, A. K. (1976) 'The versatility of religio', *The Mediterranean World. Papers Presented in Honour of Gilbert Bagnani*, 36-77, Ontario.

Mommsen, Th. (1908) *The History of Rome*, translated by W. P. Dickson, London

Morley, M. (2000) *Ancient History Key Themes and Approaches*, London

Morris,I (1992) *Death-Ritual and Social Structure in classical Antiquity*, Cambridge

Muth, R. (1978) "Vom Wesen Römischer 'Religio' ", *ANRW* II.16.1

North, J.A. (1976) 'Conservatism and Change in Roman religion', *Papers of the British School at Rome* 44.

North, J. A. (1986) 'Religion and Politics, From Republic to Principate', *JRS* vol.76

North, J. A. (1989) 'Religion in republican Rome', *CAH*, VII vol.2 2nd ed

North, J. A. (1990) 'Diviners and Divination at Rome', *Pagan Priests*, ed. by, Beard, M. and North, J. A., Cornell UP

North, J. A. (1995) "Religion and rusticity", ed. T. J. Cornell and K Lomas, *Urban Society in Roman Italy*, UCL UP

North, J. A. (1998) 'The religion of Rome from monarchy to principate', in Bentley, M. (ed), *Companion to historiography.*

North, J.A. (2000) *Roman Religion*, Oxford

Orlin, E. (2007), "Urban Religion in the Middle and Late Republic", in *CRR*

Otto, W. (1909) 'Religio und Superstitio', *Archiv fr Religionswissenschaft* 12.

Poetscher, W. (1985) " 'Numen' und 'numen Augusti' ", *ANRW* 2, 16-1,

Phillips, C. R. III (2007) 'Approaching Roman Religion: The case for *Wissenschaftsgeschichte*', *A Companion to Roman Religion*, 10-28.

Raaflaub, K. A. (2005) *Social Struggles in Archaic Rome: New Perspectives on the Conflict of the Orders*, Blackwell, originally published 1986

Rahmani, L.Y. (1982) ,"Ancient Jerusalem's Funerary Customs and Tombs: Part Three", T*he Biblical Archaeologist*, Vol. 45, No. 1 (Winter, 1982)

Rasmussen, S.W. (2000) "Cicero's Stand on Prodigies: A Non-existent Dilemma?", *Divination and Portents in the Roman World,* Odense UP

Rawson, E. () 'The interpretation of Cicero's "De legibus"', *ANRW* I.4

Rives, J. (2007) *Religion in the Roman Empire*, Blackwell

Rose, H., J. (1948) *Ancient Roman religion*, London. (*Religion in Greece and Rome* 所収の 1960 年版を使用)

Rüpke, J. (2007) *Religion of the Romans*, Cambridge; 独語初版: Munich, 2001.

Rüpke, J. (2008) *Fasti Sacerdotum*, Oxford

Rüpke, J. (2012) *Religion in Republican Rome Rationalization and Ritual Change*, Pennsylvania UP.

Scheid, J. (1985) *religion et piété à Rome*, Paris.

Scheid, J. (1987) 'Polytheism impossible; or, the empty gods: reasons behind a void in the history of Roman, religion', *History and Anthropology*, Harvard.

Scheid, J. (1998) *Commentarii Fratrum Arvalium,* Rome

Scheid, J (1998) *La religion des Romans*, Paris; 英訳は *An Introduction to Roman Religion* (2003), Edinburgh, p.22-23.Scullard, H.H. (1981) *Festivals and Ceremonies of the Roman Republic*, London.

Scullard, H. H. (1981) *Festivals and Ceremonies of the Roman Republic*, London.

Sharpe, E. (1998) *Comparative Religion - A History*, London

Smith, W. C. (1991) *The Meaning and End of Religion*, Mineapolis
Toynbee, J. (1971) *Death and Burial in the Roman World*, London,
Usener, H. (1896) *Götternamen, Verusuch einer Lehre von der Religiösen Begriffsbildung*, Bonn.
Visscher, F. (1963) *Le droit des tombeaux romains*, Milano
Wardman, A. (1982) *Religion and statecraft among the Romans*, London
Weinstock, S. (1960) 'Two Archaic Inscriptions from Latium', *JRS*, vol.50, 112-118.
Weinstock, S. (1961) '*Römische Religionsgeschichte* by Kurt Latte', *JRS*, vol.51, 206-215
Weinstock, S. (1971) *Divus Julius*, Oxford.
Weber, M. (1991) *The Sociology of Religion,* Beacon Press, 1963, 独語初版は 1922 年)
Wiseman, P., *Remus,* (1995), Cambridge
Wissowa, G. (1912) *Religion und Kultus der Römer*, 2nd ed., reprinted 1971, München.

日本語文献

キケロー選集２「フラックス弁護」小川正廣訳、岩波書店、2000 年
キケロー選集３「ピリッピカ」根本英世・城江良和訳、岩波書店、1999 年
キケロー選集６「発想論」片山英男訳、岩波書店、2000 年
キケロー選集８「国家について」「法律について」岡道男訳、岩波書店、1999 年
キケロー選集１０「善と悪の究極について」兼利琢也訳、岩波書店、2000 年
キケロー選集１１「神々の本性について」山下太郎訳、岩波書店、2000 年

フュステル・ド・クーランジュ『古代都市』田辺貞之助訳、1995 年
カール・ケレーニイ『神話と古代宗教』高橋英夫訳、新潮社、1972 年
P・ブラウン『古代末期の形成』慶応義塾大学出版会 2006 年
K・ホプキンス『古代ローマ人と死』晃洋書房 1996 年
K・ホプキンス『神々にあふれる世界』岩波書店 2003 年

小川英雄『ローマ帝国の神々　光はオリエントより』中公新書、2003 年
小川正廣『ウェルギリウス研究　ローマ詩人の創造』名古屋大学出版会、1994 年
島創平「ローマ人の死生観 ―古代ローマの墓について―」
　東洋英和女学院大学死生学研究所編『死生学年報』2006 年
毛利晶「古代ローマにおける神と人」弓削達・伊藤貞夫編
　『ギリシアとローマ―古典古代の比較的考察』所収　河出書房、昭和 63 年
本村凌二『多神教と一神教』岩波新書、2005 年

弓削達『ローマ帝国の国家と社会』岩波書店　昭和 39 年
吉村忠典『古代ローマ帝国　その支配の実像』岩波新書　1997 年

論文の内容の要旨

論文題目：　共和政期ローマにおけるローマ人の宗教についての一考察
－ religio 概念を手がかりとして－

氏　　名：　小　堀　馨　子

本論文は、共和政期ローマにおけるローマ人の宗教に関して、ラテン語の religio という概念を手掛かりにして、古代ローマ人がどのような形で宗教的な事柄、彼らの言葉で言えば「神々に関する事柄」に対応していたのか検討し、そこに現れる彼らの思想の意味を探る、謂わば古代ローマ人の宗教意識とは如何なるものであったのかを問う試みである。

従来の歴史学研究の立場からは、史料分析を中心に捉え、史料本文の表現の下にこめられている古代ローマ人の思想の解明にまで立ち入るだけの関心を示していない研究が多かった。その一方で宗教学の立場からは、東方から流入した諸宗教が古代ローマ人の間でどのような役割を果たし、また、影響を与え、且つ自らが変容を遂げていったかについての宗教史的研究は存在したが、古代ローマ人自身の宗教への関心は概して低調であった。それらはとかく十分な史料分析に根差さない、現象面に主に着目しての研究が多くなっていた。本研究は歴史学からの視点と宗教学固有の視点との双方の間に生じがちな間隙を調整する架け橋となるような研究を目指した。

本論文では序章第二節で本論文の扱う古代ローマ共和政期という時代と、その時代のローマという国家の版図の輪郭を確認し、第三節では古代ローマ宗教全体に対する諸研究の

中で代表的なものを個別に概観し、研究史の流れと、その流れの中に浮上してきた問題意識の変遷をあぶり出す。序章第四節では、本論文で最も重きをおくキーワードとして religio を取り上げる意義を述べ、キケロやゲッリウスによる定義を十分に検討し、またそれを補完するようなマイケルズの業績にも示唆を得て、religio が一義的には到底定義できないほどにその用法が多様であることを確認した。またグロズィンスキーの提示する religio と superstitio が重要な対概念であること、しかしその対称性を明らかにするためにはさらなる詳細な語義分析が必要であることに同意しつつ、一方で、ケレーニイが指摘するように religio の持つ〈慎しみ〉の意味は、ローマ人の宗教生活における積極的な自発的態度を意味する重要な含意であることを確認し、通常の歴史学において従来記述が乏しかった religio に特に照明をあてて考察することの意義を主張した。

第一章では、古代ローマの宗教の特質を把握するにあたって、ローマ固有とは言い難いが、古代地中海世界の諸宗教に共通な特徴で、古代ローマの宗教理解にとっても重要であると思われる事項を、概説的に述べた。各事象を要点だけ述べたため、ここでの議論はあまり深まっていないが、古代ローマ人の宗教の全体像をある程度把握するには有用であろう。第一節では古代ローマ人が神々に対してとっていた態度の諸相を検討し、第二節で古代ローマの歴史において、どのように特定神格の祭祀が国家祭祀として国事に導入されていったのかという経過を跡付けた。第三節では、ローマ人が行っていた、種々の抽象的な徳目が神格化されていったという現実を検討し、その中で religio はなぜか神格化されなかったという点について簡単に考察した。第四節ではローマ人の宗教生活に関わりのあるラテン語のキータームを検討し、numen （神意）という単語が、religio 同様神々の存在を前提としている意味で、ローマ人の神に対する意識を表していること、do ut des という成句は通常は一回限りの互恵的かつ利己的な行為として捉えられがちであるが、実は対象となる諸神格との永続的な交流を願う行為であること、sacrificium（犠牲式）、及び sacer, sanctus, religiosus という類似して混同され易い三つの形容詞の内包の違いを確認するなど、本章を以て本論文全体の構造を支える枠の基礎工事とした。

第二章では、古代ローマの卜占が実は「慎んで神意を伺う」というローマ人にとって重要な態度を表わす事象であることを、神官職の職務の分析から考察し、特に第二節と第三節で卜占にとって重要な鳥卜官と腸卜官の制度の違いに焦点を当てて考察した。この卜占制度は、ローマ人にとって何らかの公的な決断を下すにはまず「神意を伺う」ことが大切であり、それは「神の言葉に耳を傾ける」という単純な手続きを踏む、古来の慣例の制度化であった。人間の側から神々の意志を伺うには鳥卜官がおり、神々が示した意志を人間が解読するためには、十五人委員と腸卜官がいた。このように官職は多岐にわたり細分化しているように見えるが、世襲によるのでも、職能専従集団によるのでもなく、ピラミッドのような階層秩序を呈する制度にもなっておらず、逆に権威が一箇所に集中して特定氏族による独占が生じないように、何重もの手だてが張り巡らしてある点が共和政ローマ特有の性質であると思われる。

第三章では、dies religiosi と呼ばれる忌み日と、loca religiosa と呼ばれる墓について考察した。第一節と第二節では、忌み日の中でも死者の祭りであるパレンタリア祭とレムリア祭について検討し、各祭儀の儀礼について論じた。ローマ人にとって、死者は神になると考えられていた。しかし、その「神になる」過程にも様々な形があり、皇帝が死後に神格化される場合のように個性と固有名が記憶されるのは特異な状況であって、通常の死者は集合的な祖霊になる。そこで近親の死者に対する生者の思いを表すパレンタリアと、宥められなかった場合に怒り彷徨う死者をどのようにして宥めるかが問題となるレムリアとを並べて考察した。第三節では、視点を祭日や忌み日などの時間的次元から埋葬の場への空間的次元に移して、loca religiosa としての墓と、そこへの遺体埋葬の方法、及び、共和政期から帝政期を通じて埋葬方法に生じた変化を考察し、古代ローマ人が死者を神と看做し、葬礼も人間から神になった存在との交流という意味で、神々との関係と捉えられていたことを理解した。本章の考察を通して religio の形容詞である religiosus が有する「死者に捧げられた」という意味を改めて確認した。

第四章では、ローマ人が「宗教」という存在をどの程度意識していたのか、それは一般的に現代人が考える「宗教」とどのように異なっているのか、という筆者が本論で最も重きを置いている観点から、主題解明への手掛かりとなるキーワードとして religio というラテン語の単語に考察の焦点を絞った。第一節では、religio の概念自体の考察に焦点を当てた従来の研究を概観し、目下の問題の整理にあてた。上に名を挙げた研究者の他に、リュプケも近年キケロの哲学的著作における religio に関する論考を著している。彼の論考は本論文準備の最終段階で目を通すことになり、示唆を受けたが、本論文の大筋に影響を及ぼす程ではなかった。第二節では、キケロ以前及びキケロと同時代の作家たちにおける religio の用法を検討した。その結果、前二世紀における習俗の枠内での軽蔑感を含んでいた用法に、前一世紀になると神々への畏敬の念という心情面に関わって来る敬神の意味をこめた用法が加わること、やや遅れて儀礼や儀式といった価値中立的な用法が加わる経過を確認した。第三節では莫大なキケロの著作に出現する用法・文例の中で、この主題の解明にとって適切と思われる用例を、その代表的なものの幾つかを取り上げて検討に付し、古代ローマ人の宗教的な事柄、即ちローマ人の言葉で言いかえれば「神々に関する事柄」に対するときのローマ人の態度を考察した。

このように多様な religio の用法を一つ一つ考察してみる時に、religio という語が古代ローマ人の間において元来有していた否定的な意味が改めて現代人である我々の眼前にその複雑な性格のままに立ちはだかってくる。即ち、宗教／religion という語の原語であったラテン語の religio 概念を改めて古代人の視点に立ち戻って洗い直してみることにより、religio 自体に本来こめられていた superstitio に近い感覚が現代人の我々の中に蘇っているのを見出す。それはプラウトゥス、テレンティウスのような庶民の日常を生き生きと描いた喜劇の言葉の端々に読み取れる経験から始まって、キケロの文章に至るまで連綿と続いている、一つの言葉の履歴として特異な脈絡を形成している。この語の持つ複雑な感覚

はその後も紀元後 1 世紀のセネカ、2 世紀のアプレイユスまでは脈々と受け継がれた。この用法がラテン教父の時代になってどの程度受け継がれ、いつ消滅したかまでは、本論文の守備範囲外なので残念ながら探究を控えることとした。

religio が元来有していた否定的な要素と、それに後から加わった肯定的な要素を多角的に検討する、という作業は、religion の語源は religio である、との判断で停止してしまいがちな宗教学において、今後とも更に考察が深められてよいのではないかと思う。

終章においては、全体を通して、改めて古代ローマ人の「神々に関する事柄」への態度、現代の言葉で言えば「宗教」に対する態度を考察した。それは神々の存在を前提とした上で、「神意に耳を傾ける」と一言で表すことができる。しかも神意に耳を傾けるためには、自己をある程度抑制しつつ内容を正しく聴きとらねばならない。正しく聴きとるには注意深さが必要である。そして聴きとった内容に対して行動面でそれへの聴従を表す必要がある。その時に、彼らが行っていた様々な儀式、特に、犠牲式や卜占を検討すると、その中には実は彼らなりに、＜神意に耳を傾けそれに聴き従う＞という原則が発露していたことが窺える。

それゆえ、古代ローマ人の宗教意識とは如何なるものであったか、という問いがもし可能ならばそれは、「神意に耳を傾けてそれに聴き従う」という態度の表明であったという答を提出することができよう。